

引導下炬

秋も深まり冷たい雨が降る十月●●日明朝、此處に八十有●歳の人生の、その尊き嘗みの一切をなし終えて、寂然としてこの世の命を結び去らんとする人あり。魔風一度吹きてついに帰らず、悲しいかなせん方もなく今ここに貴方をお送りいたします。

導師作法

爰に新帰元 俗名 ●●●●、贈る戒名を ●●●● 信士と号す。

今静かに思いおこせば、靈位は、●●市において●●家の長男として生をうけられました。幼少期は戦時中から始まり、敗戦後は日本全體が復興するための大変な時代であります。貴方はその大変な時代を乗り越え、無事成長され、大学では語学を学び、卒業後は貿易業の道へと進まれました。

●●に就職され経験を重ね、●●歳頃には独立し、以降長きにわたり確固たる信念のもと事業を営まれました。

また、最愛の伴侶となる●●夫人と結婚し、幸せな家庭を育み、その幸せの中で一女一男を授かるも、幼くして長男をなくされるという、悲しい思いもされました。

悲喜こもごもの言葉のとおり、悲しみと喜びのなかで懸命に人生の歩みを進め、貴方が●●家の大黒柱として、持てる力を遺憾なく發揮し、一心に精進をつづけてこられたからこそ、家門は今日隆盛し、今こうして最愛の奥さまやご長女様、お孫様に幸せに見守られていらつしやいます。

在りし日の、懸命に貿易事業に励まれた貴方のお姿、いろいろなことに夢中になつて取り組まれた貴方のお姿、また、他者への優しさに満ち溢れ多くの友人に恵まれた貴方のお姿やお孫様へ一心に愛情を注がれた貴方のお姿など、貴方が歩んでこられたことを物語る全てのお姿が、これからもご家族様の心にとどまり、時として人生の道しるべとなつてくださることと存じます。

然して、彼の秋の木の葉が、一夏のやくめをなしおえて静かに音もなく其の梢を離れて行くよう、貴方は其の人生に授かつた一切の役目をなしおえて、享年八十●歳を生き終え、今日静かに、淨土への旅立ちと相成りました。此のなまみの身体を持つかぎり、病むことは、そして命終る日を迎ねばならぬということは、だれひとりとして逃れる事の出来ない哀しい定めであります。既にして、その身の上に起つて来たことは、そして、どうしても逃れる事の出来ないものは、そのままに、正しく受けて行くより道はございません。

貴方と共に幸せな人生を歩み、晩年は徐々に身体が動かしづらくなつた
貴方を懸命に支え尽くしてくれた家族親族、その方たちの深い深い愛情に感謝して、
その世話を受けることが出来たことを此の世の幸せとして、どうぞ
安らかに如来のみ国にお帰えりください。本日葬送の儀に臨み、家族、親族、
共に集い、貴方への大きな大きな感謝の気持ちを胸に、共に合掌して阿弥陀
如来のみ名を唱えてここに貴方をお送りいたします。どうかお淨土に在りて、
先に旅立つたご先祖様とともに、後に残りしご家族を見護りつつ、ほほえみの
中に生き給わんことを念じ上げます。

新帰元、●●●信士、靈位、今、多生廣劫を経ても生まれ難き人界に生まれ、無量億劫にも遇い難き仏教に逢えり。この度、生死を離るる道、淨土に生まる。彼の國に生まるること、ただ弥陀の本願に乗り、生死の海を渡り、極楽の岸に着くべきなり。

阿弥陀仏、かねて末代の衆生を憐み、無上殊勝の大願を起こし、易修易行の念佛をもつて直ちに往生を得せしめ給う。これを念佛往生の本願と言ふ。すなわち無量寿經に曰く、もし我れ仏を得たらんに十方の衆生、至心に信樂して我が國に生ぜんと欲して乃至十念せんに、若し生ぜずば正覺を取らじと。

まさに知るべし、本誓の重願空しからず、衆生称念すれば必ず往生することを得。

今當に靈が往詣樂邦の首途に臨んで一句 錢せん。

諦かに聽け、諦かに聽いてよく之を思念せよ。

釈迦はこの方より發遣し、弥陀は彼の國より來迎し給う。かしこに喚びここに遣る。あに行かざるべけんや。**松明放下**
莫謂西方遠 唯須十念心（十念）

後段訳

今、私たちは非常に長い間（多生廣劫）輪廻を繰り返してもなかなか生まれることのできない人間としてこの世に生まれ、また数限りないほど長い時（無量億劫）を経ても巡り会うことのできない仏教の教えに出会うことができました。

この度、迷いの世界（生死）を離れる道、すなわち淨土に生まれるのであります。かの

極楽浄土に生まれることは、ただ阿弥陀仏の立てられた本願に身をゆだね、海のように広い迷いの世界を渡り、極楽の岸にたどり着くのです。

阿弥陀仏は、あらかじめ、お釈迦様がなくなつて相当の期間が経過した時代の私たちのような者たちを深く憐れみ、この上なく優れて特別な誓い（無上殊勝の大願）とたてられました。そして、修めやすく行いやすい念佛によつて、直ちに淨土に往生できるようにしてくださいました。これを「念佛往生の本願」といいます。

すなわち、『無量寿經』には、次のように説かれています。「もし私が仏になつた時に、あらゆる世界の人々が、心から（至心に）私を信じ慕い（信樂して）、私の國に生まれたいと願い、わずか十回でも念佛を称えるのに、もし彼らが往生できないようであれば、私は決して仏の悟りを開かない（正覺を取らない）」と。

そして今、阿弥陀様のこの重い願いは実現し、私たちが念佛を称えれば、必ず淨土に生まれることができるのです。

今まさに、安らかな淨土（樂邦）へ旅立つ門出にあたり、最後に一句を贈ります。よく聞いてください。よく聞いて、この教えを心に深く念じてください。

お釈迦様は、この世（娑婆）から「行きなさい（發遣）」と送り出してくださり、阿弥陀様は、あの極楽浄土から「迎え入れよう（來迎）」としてくださいつています。あらから呼び、こちらから送り出すのです。あなたは必ず往くのです。

莫謂西方遠 唯須十念心（西方（極楽浄土）は遠いなどと言うなかれ。ただ十念の心（念佛と称える心）ともらひればよいのです。）

淨土宗西山深草派 高城山 帰命院 十念寺 沙門 賢空

参考文献・四季社 淨土宗下炬事例別集成